

Title	『Feiqe no monogatari』の研究：問答の研究 (その一)
Sub Title	Feiqe no monogatari (I)
Author	東, 澄子(Azuma, Sumiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1965
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.20, (1965. 11) ,p.38- 57
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00200001-0038

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『Feige no monogatari』の研究

——問答の研究——（その一）

東 澄 子

一 序

欧州名『Feige no monogatari』の簡単な説明を記述してみよう。これは天草本（版）平家物語又は口訳平家物語などと呼ばれているもので、久しい間その存在は知られず、明治時代になって British Museum にあるもののみが我国の学者にも知られるようになった。右の本を所蔵するに至った経路は詳らかにされてはいないが、吉利支丹の布教に従事した外人宣教師の手を経たものであったらうと考えられる。

『Feige no monogatari』（以下天草本平家物語と記す）は、凡そ四百年程前に吉利支丹の教団の一機関であった Amagusa Collegio（以下天草学林と記す）で日本の言葉・歴史を学びたい人の為に編纂されたポルトガル式ローマ字本である。物語の内容は四巻に纏められ、この中に六十四の内題があつて話の内訳を一応規定しているが、これらの話は問答の形態で筋の展開を意図したような構成となつてゐる。編者は元禅僧で入教したと言われる靈名「Fahan」（以下はびあん）と記す）と称した日本人が考えられている。

原書については東洋文庫刊の写真複製版でその様相を知り得るが、当時の宣教師の書翰によると、教団内で編纂されたもので、今日既に伺い得ないものもかなりあるようであり、これらの内容を明らかにすることは至難であると言える。然し前述した如く、特殊な条件と目的のもとに編纂された物語の解明を試みる事は意味ある事と考え、以下の文章はその様相の一端を解こうと努めたものである。具体的な編纂方針の大綱ともいうべき事柄は、師から、はびあんに示されており、その為に構成と内容に特色ある傾向が現れる結果となつたと言えようが、次に物語を除いた問答の部分に焦点を絞る事によって、内包する一傾向を見出したいと思う。

二 編者について

『天草本平家物語』の編纂者は、前述したようにはびあんと考えられており、又その際に師が編纂方針を示していても、細部に関する事共は、編者の個性を反映させている面があると思う。これを具体的な問題として挙げるならば、物語の部分を除いた問答の形態と内容には、雑談の形態を活かそうとしながら個性が滲み出ているようであるが、物語の方は師の方針に反しなまいと思われ内容についてはかなり忠実に原拠を辿つたと認められる為、前者の如き個性らしいものは見出し難いと考えてよいと思う。個性を特色として見出す為には、特に編纂前の編者について理解を深めておく事が必要であると思う。

はびあんが編者とされているのは、『天草本平家物語』の緒言に於て「Docujimo fionti taixite xosu」の文の最後に、

Fuan Fabian fuxxinde xosu

とある事による。はびあんに関しての考察は、新村出氏の「天草吉利支丹版の平家物語抜書及其編者」及び、姉崎正治氏の「ころびイルマン不干斎ハビヤンの事」等を中心にした諸資料・研究等で、その経歴は一応跡づけられていると言えよう。次にこれらの概略を述べてみると、永禄八年（一五六五）に生まれ、加賀若しくは越後の人であったと思われるが、後、京洛で禅門にはいり恵俊と称したようである。天正十一年（一五八三）十九才で吉利支丹へ入教し、文禄元年天草学林で『天草本平家物語』の編纂に当たったのは二十八才頃と推定されている。後京都に上り、神・儒・仏の各宗に通じた才を生かして布教に従事したようで、慶長十一年には『妙貞問答』を著し、同年松永貞徳の价で、二十四才の林道春と会っている。同十二年には Pava が家康に候して同書を呈しているが、ほどなく棄教

したようで、京を遁れて摂州枚方に去り、中宮村で過したようで元和六年『破提字子』を叙述したが以後の事は不明である。

今日、はびあんを知る為の基礎となる文献は、日本側の資料は内容的に検討の必要があると思われるものや『天草本平家物語』編纂後のものなどであり、教団側の資料は断片的に地位等を記載している程度に止るものである為、編者についての未開の分野は大きいと言わねばならないであろう。次に物語編纂前の編者を理解する為に、入教以前の身分と天草学林での地位とについて考察を進めよう。

編者は入教前に禅僧であったであろうと言われている事は既に記したが、『切支丹宗門来朝実記』には、

壹人は生国加賀国の禅宗惠俊と云者成しが……生国を出て乞食と成、都へ登さまよひあるきて、真葛が原に倒れふし、今は命もきえなんとする折から、右の南蛮寺へ連行、伊留まん療治を加へければ、次第に本ぶくして、終に元の形と成、依之此宗門を帰依し、名をはびやんと付、則同宿とす。殊に発明なる故、寺の執事の第一と成……

とあり、『吉利支丹物語卷上』には、

元和元年のころ、大阪において吉利支丹の法繁昌して武士、町人、諸浪人ども、門前に市をなす……後室なのめならず喜び給ひて、乃ち吉利支丹が寺へ使者を立て、曰く、「学問広博にして弁舌あきらかなるイルマン、これへ入り候へ。約束の如く仏法の勝劣を聞かんと」侍り給ふ。時に巴毗弁と申して、いにしへ禅坊主おちと見えて眼の中くるくとして、水の流るる如く、弁口とどこほる事なし。年は五十ばかり……

とあり、両者は共に伝説めいた話の中に、はびあんは禅僧であったと記述している。

これに相当すると思われる教団側の資料には、元禅宗坊主で法華坊主との宗論に勝った仏教に精通しているイルマンの話があるが、この人物がはびあんであったかは明らかでないとしても时期的に一致するし、『天草本平家物語』編纂後の彼の京都での過し方と、この記載内容とはかなりの類似点が見受けられると思われる、仏教を相手の宗論の著書としては『妙貞問答』の上巻がある。彼は一六〇六年には都にいたが、『一六〇六年に会が日本において所有する教会並にそこに居住せる教師の目録』の、Ximoguo (下京)の箇所には

Pe Carlos Spínola 監事

Jernaó Tóin Vicente

Jr. *fabiao*

Jr. Dioguo

" Tadeo

" Raadal

との記録を留めており、この記載の仕方からは中堅どころとして実質的な仕事をし得る立場を想像させられるが、はびあんが不干であった点は、『羅山先生文集』で、林道春とはびあんの出会いを、

慶長丙午六月十日道春及信澄依^レ頌遊^カ价^カ不^レ意^カ到^カ三^カ耶蘇^カ会^カ者^カ不^レ于^カ氏^カ許^カ……

と述べている事から裏付けられる。

従って、はびあんの元禅僧であったかの点については伝説的な表現を出るものではないとしても、『天草本平家物語』の編纂後は下京教会に配属されていたし、前述した日本側の資料三書のはびあんについての記載量の割合は少ないとは言えない事などから考えれば、その方面ではかなり名を知られていたであろうと推定もし得よう。従ってこのような立場の人物であつてみれば、入教前の身分についてはかなり正確なものが伝る確立は高かつたと考えたい。

はびあんが禅僧であつた事を推定し得ると思われれるものは、以上の資料以外に彼自身の著書、『妙貞問答』・『破提字子』である。これらの二書を考察の爲の資料とする事は『天草本平家物語』の編纂後に成立している理由で必ずしも適當とは言えないであろうが、この物語の筋はかなり忠実に原拠本を辿つたと推定し得る点から編者自身を反映しているものは少いと考えられるのに対し、二著書は、はびあんならしさが出ている資料と思われるので、解明の手がかりとせざるを得ない。

『妙貞問答』・『破提字子』について簡単に説明すると、前者は吉利支丹の護教論で、成立は中巻の文句から慶長十年であり、後者は排教論であるが、序文と巻末の識語を見るとこの成立は元和六年庚申孟春となつてゐるのを考えれば、前者の方が資料として時期的な

ずれば少い事になる。「妙貞問答」がはびあんの著書である点については、新村出氏が『羅山先生文集』から証明されたが、「破提字子」については今のところ他文献からの証明はなされていない。が、『破提字子』が書かれねばならなかった事情は、吉利支丹に対する迫害が厳しくなった為の社会的事情・はびあんの個人的事情に求められよう。

(3) これらの二書の中に、元の禅僧の要素が如何に含まれているかは興味深い問題であるが、文章からは博学のイルマンの色彩が濃く、熟語例からも特に禅宗出身者であると断定することは困難のように思われる。然し文中の内容に比喩とか大悟解脱の境地を見得るのは、禅僧時代の名残りともみてよさそうである。

『妙貞問答』は、上巻が欠巻になっており、「不干齋巴鼻庵」はこれに相当すると思われる説明を

上ノ巻ニハ仏法ノ空無ヲ本トセバ皆邪ナル法也ト嫌ヒ退ケ……

と、上巻の内容の狙いを述べているが、林道春は『羅山先生文集』で、同箇所を、

又見妙貞問答書、不干之所作也使于読之其書設妙秀幽貞阿尼互問答之或論（十宗之外加二向）釈氏（日蓮一至三三宗）或言儒道及神道……

と上巻の内容を具体的に説明している。この欠巻について姉崎正治氏は、寛政の没収教書の一つである「仏法の次第略抜書」を考証された。この中で、はびあんが上巻について言及した「仏法ノ空無ヲ本トセバ……」に相当するような箇所は

一向宗の開山親鸞上人より伝へられし經教信抄と云秘書あり。此書をは門跡の親子兄弟より外には伝へず、所詮仏法の極は空無に究（る）と心得玉へ。

がある。姉崎氏の見解によれば文の構成上疑義はあるが、「大体妙貞問答上巻の内容を伺ふに足る」とあるように、まだ検討の余地は残されていると考える。

「仏法の次第略抜書」の内容は、仏教通論の批判のようなもので、禅的要素もかなり比重を占めているようであるが、禅者と断定する事は不可能のように思う。ただ（第一節）の「仏法総論」では仏教に対して自己の見解を述べており、このような場合、自然に自己の経験に近い宗派で説き進められるようになるのではないかと思われるが、仏法の定義を

夫れ仏法と云は、弥陀、釈迦、大日、是也。右三仏を法報応の三身と云也。是即人間の一心の事也。

と、禅宗の常套語である即心即仏の意で記述している事と、この語の具体的な説明として、

人の心には三つの精徳あり貪欲、瞋恚、愚痴。此三つを分けて云へば、愚痴と云は、無念無心なる処を法身仏と云、是を大日如来と云也。次に貪欲と云は、をしいそ(?)ほしいと思ふ処を報身仏と云、之を阿弥陀如来と云也。次に瞋恚と云は、いかりを起して、遺恨をふくむ処を応身仏と云、是を釈迦如来と云也。是れ皆人間の一心に具足する者也。此外、観音、薬師と云も、人の身を離れて有る事にてはなし、……

と、心の中以外に仏を見出すものではないと述べている事などは、共に著者の内的要業を示唆する表現内容と考えてよいであろう。

編者の入教以前の身分が禅僧であったとの記述は、以上述べた如くはびあんについて記述された資料と彼の著書とを併せ考え、かつ傍証として「仏法総論」を加味して考えた時、例え伝説的な表現であったとしても間違いない内容であったと思われる。『妙貞問答』の妙秀が浄土宗の信者として設定されている事と、この作品中には浄土宗の傾向も強いという点については、禅宗の中には禅と浄とが重なる面もあったようであり、禅宗全盛の時代でも南無阿弥陀仏と唱えれば、極楽浄土へ往生できると説く浄土宗は大衆の間に根強く滲透していた事などを考えた時、それらははびあんの前歴が禅僧であることの妨げとはならないであろう。

はびあんが吉利支丹へ転宗し、『天草本平家物語』を編纂するまでの過程は詳らかとは言いがたく、既に引用した「……依之此宗門を帰依し、名をはびやんと付、則同宿とす。殊に発明なる故、寺の執事の第一と成又一人は和泉国の住人呉服屋……」の部分と、〔一五〕九二年十一月に本会が日本副管区内に於いて有する教会及び駐在所の目録、並に其処に居住せるペアデレ及びイルマンの名簿」の中で天草学林の箇所を

94 Jir.° *Vaguo* (わんご) *Jabian*

日本人、拉丁語を少しく解す

95 Jir.° *Tacey* (高井) *Cosme*

日本人、日本語以外は解せず

右二名は日本語の教師にして、日本語を教授せり。

とあるのを併せて推定してみると、禅僧であった事の教養は、宗論の折には役立つともいたろうし、この面で活躍する事によって有能な布教者と認められる機会があったと思われ、又日本の文物に多少は通じていたであろう事などから彼の存在を示す機会は多かったと考えられよう。

右の名簿は天草学林長から記載してある事から考えれば、はびあんは日本語教師として責任者の地位にあったようである、学林内での日本語の勉強は右の二人で進められていた事になる。従って『天草本平家物語』の編者に疑点があれば、Cosme の在在が浮んで来るが、「日本の文学に関しては他の何れのイルマンよりも勝っていた」の評価を受けていた Vicente は、名簿では都にいたとあり、例えこれらに関する事共が推定されても、はびあんが物語の編纂から完成まで、責任ある立場にあった事は動し難い事と言うべきであろう。はびあんについての記名は、名簿が「Yunguo fabian」で物語は「Fucan Fabian」となっており、前者は一五九二年十一月の記述であり後者は翌月のそれであるから、同一人物と推定されている事は正しいと考えて差支えないであろう。これは別称を用い得た当時の風習を、はびあんも踏襲していたのであろう。

以上編者ははびあんについては、入教前の身分が禅僧であったとの記述は正しいと思われるし、その為にも入教後重んじられる面もあったようである、『天草本平家物語』の編纂時には、日本語教師として責任者の立場に在ったと考えられる。この二点は、前者については物語の部分を除いた問答の内容の傾向を示唆するものとして、後者については物語の編纂についての緒言「Docujuno fitoni taixitexosu」を書いた立場を明確にするものとして重要であろう。

三 天草本平家物語成立までの内部事情

(7) 天草本平家物語は天草学林で編纂された。天草学林とは、九州天草に設けられた教団内の高等教育機関であるが、次に天草学林と物語編纂に至る内部事情とについて調べた諸点を纏めてみよう。

まず学林について述べてみると、その設立は教団が日本での事業の一つとして予定していた事であり、下部教育機関 Casa de Pro-nacoó (練習所) を出た後、イルマン等の学習を継続させる事に目的があつたのであつて、巡察師 P. Alessandro Valignani が布教状況

を視察に来日していた当時、臼杵で行われた会議で府内の教会を学林に昇格する事を決議し（一五七九年）、規定は欧州の例に倣って Valignani が決めたのであり、初の学林が大友義鎮の所領内に設立されたのである。学林の運営費は、ポルトガル王の寄付金（年額千クルサド）が資金として予定されており、これはマラッカの税関から支払われる事になっていたが、マラッカの戦争、他の事情で差支えた時もあったようであり、その後の日本における吉利支丹への迫害等の事情から、その恩恵に浴せる機会は多くはなかったであろう。

その後、一五八七年（天正十五年）に吉利支丹に対して発せられた禁制・追放令によって、府内の学林の存続を中断せねばならなくなったが、その後の学林の所在は、

一五八八年 千々石

一五八九年 有家

一五九〇年 加津佐

一五九二年 天草

一五九七年 長崎

と転々とするが、有馬領が特に選ばれた理由は、領主の有馬晴信の吉利支丹への信仰と愛が深く、コンパニヤのパードレ・イルマンを悉く引受ける事を申し出たからで、後の島原の乱では『嶋原一揆倉記』によると、

有家村家数七百七十軒

人数四千五百四十五人

口津村・加津佐村両所家五百八十一軒

人数二千九百四十九人

は、「残らず一揆百姓」であるのを見れば、結果論的な意味を含むにせよ、選ばれた土地であったと言つてよいであろう。

加津佐から天草へ移転の動きは、欧州へ行った四人の少年使節を伴つて来日した Valignani が秀吉に謁見して加津佐に戻った時、パ

ードレを訪問した天草領主である天草種元が、都からの消息で、秀吉の吉利支丹への態度が変っていないのを知り、自分の領土へ来るよう進言した事から始まるが、当時の吉利支丹に対する直接・間接の圧迫の危険感が、Valignani をして有馬領主に対して移転の同意を得、種元に報告に行かせる結果となった。

種元のこの申し出は信仰の為ばかりの理由ではなく、他の吉利支丹領主との同盟を強固ならしめる為という政策上の問題も考えた上での事であったようである。しかし外人宣教師の天草領主への評価は、親子二代に亘るものとして、種元に対しても高かったし、天草の土地の印象を移転前ではあったにせよ、よく教化され悉く吉利支丹の土地で、土地は悉く山で道は嶮岨であり、寒くて貧しい島と記述されているのを見れば、当時の社会情勢を考えた時、当を得た移転先であったと言えよう。

天草学林跡は現在の本渡市の町の南丸尾が丘ということになっている。天草へ渡った当時は、種元から数軒の家を与えられたようで、後に「こんばにやの人々六十人、学生のうちより六十余人、其他召使のものを容るるに足る……」学林が造られたようである。前述した名簿⁽⁵⁾には、教会及び駐在所の目録と共に各人の語学力が記載されている。特にこれが記載されたという事は、日本語の修得は教団が解決せねばならない大きな課題であった事を意味するものであろう。この名簿から外人パードレ・イルマンの語学力の平均を求めると、日本語を解しそれにて説教し日本語を綴る事が巧な者がいた反面に、これから学ぼうとしている者もあり、日本語は一応解し得るが、人々へ説教をするまでには至らなかったという事が言えるであろう。このように外人宣教師の語学力に対し、日本人のラテン語の学力の詳細は不明であるが、修学中の者が殆どであって、第一級のラテン語学生もいた半面に、日本語以外は解し得なかった者もある。尚、はびあんにも関係深い事として、教団内の日本人はどの程度に西欧の文物の影響を受けていたかについては興味深い問題であるが、輸入及び勉強の為の書籍の選択にも外人宣教師の強い方針と態度が伺える事から、今日的な意味での欧化の傾向は考えられないとしてよいであろう。

原書扉紙の一文は、宣教師側の語学力の事情に触れたものであるが、「Docujino fitoni taixite xosu」では、師から編纂を指示された点を

Sareba vareta cono cunni gitate, tenno minorio tocanto surunua, como cunino fuzou no xiri, mata colobano tassubeqi colu

mobpara nari. Caruqayuyeni como rigidoño tasugeto narubeqi Jichiqino xowo vaga curino monjini vixuxi, xini chiriba metosu: naqi sono xowo yerande coreno ameti:

と、具体的に示している事から、『天草本平家物語』は外人宣教師の勉学の一助とする為に編纂された事が理解できる。編纂の方針の大綱は師が決めたもので、この内容は物語の構成上の問題としては三つに大別し得ようが、その一つは、

ima como feige uoba komotno gotoquni xezu, rionin aitaizite zotamio nasuga gotoqu, cotobano tenifano xoja keyotonari:

と、雑談の体さへさう指示された事であり、二つめは、

ichinimi amatano naqunyo tonaye aru colu uomo saqubexio nari:

と、一人についての多くの別称・官位の称号を省くように言われており、三つめには、

tattoqi von aruji Iesu Christono Euangelhono minorio fromen tame nareba, como rigunno koyorito narazaru colono ba minamotofe nozocaziba arubeccarazu tonu gui nari.

と、布教の妨げになる事はすべて除くようにとの強い態度が示された事が引用されている。従って物語編纂の基本方針は師によって示されたもので、細部の内容の取捨については、多分編者に任されたのであつたらう。

尚、平家物語を選んだ理由を

Kicareba cotobano manabigaterani Jichiqino vōjino tomurōbeqi xo core vonoxitoyedomo, nacananzu Yeizāno jūrio, monsami na tacagi Guenyé fōhno keisacu feiqemogatarini xiquna arajifo vomoi:……

と、平家物語に若くはあらじと述べているが、はびあんがこのように考えるに至つた理由は、平曲全盛の時代であつた社会的背景に求めらうが、教団内で琵琶法師の前歴を持ち、日本人初のイルマンであつたロレンソなどの感化もあつたかも知れない。一方はびあんは原拠本に対する見解を、

como monogatarino chicarano vovobitororokajonjocotobano tagyvezu xoja xi, nuqigagi to nazixaru mono nari

と、可能な限り原拠本を忠実に書き写したと著している。

『天草本平家物語』の成立に際しては以上述べたように教団内部の諸事情・諸条件が背景となっていたのであり、当時初めて日本に運び込まれた欧文印刷機で、欧文の印刷係であった「Jr. Joao baptista」の手を経て、今日見得る体裁となったと思われる。

四 文献に見られる問答体の諸相

『天草本平家物語』の物語を除いた問答の部分に、如何なる影響関係が見出せるかは興味深い問題であろう。結果論的に言えば、今日見得る⁽⁹⁾当時の禪門の語録に、影響を受けたと思われる傾向が見出せるのであるが、この諸要素の考察を進める前に、他の問答ものとの影響関係を明らかにせねばならない。

他の問答ものとの影響関係とは、はびあんが如何なる問答ものに接触する機会があったかを推定し、どこに類似点があるかを見出す事になるが、この為には当時の問答の諸相とはびあんのそれとの関連を求めた上で考察されねばならないと思う。

はびあんの入教以前の身分が禅僧であり、吉利支丹に転宗し、松永貞徳とも交渉があったという経歴から影響関係を推定し得る問答もの系列は、文学問答と宗教問答であろう。これらの系列には、前者では演劇・鏡ものの流れ・歌論の流れを辿り得るし、後者では教義ものと言えるであろうが、教義ものの内訳を大別してみると、⁽¹⁰⁾仏教諸派の教義問答・禅宗の説法問答・吉利支丹の教義問答となるが、⁽¹¹⁾告白の記録も異色ではあるがこの分類の中に一応含めておこう。

次にこれらの問答体の形態の特色を挙げれば、演劇・鏡ものの中では大鏡に劇的構成がみられる以外、他は教示的に内容を進める為の、又は話させる為と思われる設問の手法が採られていると言ってよいであろう。歌論ものの一部と説法問答の最後には結びとも言い得る内容の文が付く。

更に発問の型の内容の特色を挙げれば、演劇・大鏡では変化に富み、説法問答にはやや流動性があり、告白の記録にはその目的の故であろうが対話的色彩はあるが、他のものは答えの内容が判明しているような又はそれに近い教示的なのが大部分を占めると言っていであるう。

右の如くに形態・発問の型の内容の基本的な特色を理解した上で、『天草本平家物語』のそれとを比較してみると、形態については、

「巻第一」の「第一」では右馬之允が発問を重ねて話の筋を進めている点に、劇的構成を意図したとも考えられるが、内容的には大鏡の程度にも変化に富むものではなく、「巻第二」以下では「第一」のような構成上の特色はないし、発問の型の内容にも流動性を帯びた教示的な内容が多い。又「巻第四」の「第二十八」の構成・内容は、説法問答の最後の文の構成・内容とに照合させ得るが、歌論ものはそれをなし得ない。従って『天草本平家物語』の形態上の特色は、教示的に内容を運ぶ為の手法として大まかに設問された傾向が濃く、雑談の意図は「第一」に強く伺われるが、「巻第四」の「第二十八」の構文は禅生活の影響であろう。次に発問の型の内容については、『天草本平家物語』のそれは、話を指定したような型でなく、予定したような型が最も多い事、茶の設定などからはある程度の変化・流動性が伺われると言える。以上の様態から最も強い線として認め得るのは禅宗の傾向であるから、当時の記録としての語録の内容の諸要素と関連づけて考証を進めていくのが妥当であろうと考える。

五 物語の部分を除いた問答

『天草本平家物語』の構成が雑談の形式をとっているのは、師がはびあんに与えた方針の一つであった事は既に述べた。物語を除いた問答の部分に、禅生活の影響と思われる諸点が伺われる事についても先に触れたが、これらの点について具体的に説明を試みよう。第一には発問の型であり、第二には「巻第四」の「第二十八」の喜一検校の話であり、第三には茶の導入の事などであるが、以下順を追って考察を進めていこう。

第一に発問の型に禅生活の影響が如何に現れているかについては、結果論的にはその徴候が濃いと推定できるという事になるであろう。物語は「*MANOJO. QICHIQENGVEJO*」(以下右馬之允・喜一検校と記す)の問いと答えの関係で物語の筋は進められているような体裁をとるが、実際は本文の為に付された内題が内容を限定していると言つてよい。次に、右馬之允はどんな問い方をしたか考えてみよう。

右馬之允の問いを読むと平家物語の知識が深く、編者はこの前提の上に設問したと思われる。これらの内容を分析してみると、次の話の内容を指定したと思われる型・話を予定したと思われる型・その他の型に分け得よう。その他の型の内容は、問いを読んだだけで

は具体的にどんな話が次にくるのかわからないが、前話と後話とを自然に関連づけている内容がかなりあり、問いがなくて物語が語られていく箇所が「巻第二」・「巻第四」に一箇所ずつある。それに合の手とでも言い得る表現が「巻第一」・「巻第四」に一つずつある。

このように三つに分けた発問の型を各巻別に纏めてみると、

(発問の型の分類表)

巻数	話を指定したと思われる型(イ)	話を予定したと思われる型(ロ)	その他の型(ハ)	計	内題数
第一	七	九	四	二〇	一一
第二	五	三	二	一〇	一〇
第三	三	一一		一四	一三
第四	五	一六	九	三〇	二八 二九
計	二〇	三九	一五	七四	六四 六三

となる。従って右馬之允の発問の型は、聞かされる話を予定して問いをかけたような内容のものが一番多く、聞かされる話を指定して問いをかけたようなものがこれに続くが、その他に属するものも、実際は聞かされる話を承知していたのではないかと感じるものもかなりあって、この見解に立つ時、その内容は予定された問いの型に含まれる事になろう。

発問の型、(ロ)が多数例を占め、(ハ)が結果論的に(ロ)に接近した内容を含む事は、教義問答などの問いの堅さのそれではなく雑談の領域に近づいた表現となっている事を意味するであろう。「巻第四」に(ハ)型が目立つのは、話が広範囲に及んでいる割合に原拠本の筋が中断される事が少かった事を示していると思う。更に内題数と発問の数は、「巻第一」を除いては何れも近い数を示しているが、これは「巻第一」が雑談の趣旨を活かした問答構成の形態をとっている事を意味する。然し「巻第二」・「巻第三」・「巻第四」

ではこの傾向を特に挙げることはできない。問いは多くの場合人物名で内容を指定又は予定の表現をとっているが、編者の物語への意識は、人物の運命を通してであったのでもあろうし、指定の発問の型で表現している箇所は、意識的な構想上の問題点が見出せるであろう。⁽¹²⁾

さて、以上述べたような発問の型は如何なる影響関係の上に成立したかの点を更に進めていくと、設問と物語との関係という立場では、「巻第一」に雑談の形態を活かそうと努めた跡が見られる。これは師の方針であった雑談の趣を出そうとした事に他ならないと思われるが、「巻第二」～「巻第四」では、内題と設問の数はほぼ等しい事から雑談の趣からはかなり離れ、教義問答式の設問形態に近づいているように思われる。一方この設問の表現内容には、数の上から言える事は、教義問答式の堅さから離れようとする雰囲気も確かにある。このような内容は狂言の如き軽妙さと評される事にもなると思うが、結局はそれほど枠をはみ出していないと思われる。物語の巻首に当るところには

MONOGATARI NO NINJI.

YMANOJO. QICHIQENGYEO.

とあり、この記載法からは狂言の配役を意図したかもしれない事は充分考え得るが、はびあんは力の及ぶ所は本書を忠実に書写したと述べており、原拠本に近いと推定されている本との校合の結果によっても、この方針は肯定し得る事などから言えば、物語は内容的に狂言化し得てはいないのである故、問いも内容を離れてはあり得ない。しかし、部分的に見られる軽妙・洒脱等の要素をも併せて考えてみた時、師の方針を狂言で応用したいとの考えは推定し得るとしても、結果論的に多くは反映させ得なかつたと考えるのが妥当ではないであらうか。

問答の関係で話の筋を進める時、円滑に進める方法として自然に話を指定した又は予定した問いのかけ方をする事にもなるであらう。しかし編者が意識したか否かは別問題として、はびあんに禅僧の前歴がある事と、問答の構成関係には劇的な雑談の関係は強いとは言えない点、尚、禅の修業問答の中にも前述したような内容の問いの型がある点を考えれば、本質的に禅生活の影響が発問の型に及んでいると考えても否定はできないと思う。これを具体的に言えば、禅僧の修業の為の問答は、長い伝統の上に築かれたもので、

(13) 変化に富んだ、発問の型が認められるが、『天草本平家物語』の発問の型は、それらの幾種類と、内容的に共通する趣がある。

故に発問の形態とその内容を併せ考えた時、物語を除いた問答の部分について、編者は雑談の趣を意図したのであろうが、結果論的にはかなり枠にはまった構成法をとり、その表現内容にも話の進展を狙いとした発問の型には、禅生活的な発問の意に触れるものが本質的に含まれていたと考えても無理ではないであろう。

第二に問題となるのは、「巻第四」の「第二十八」の喜一検校の話である。これは内容的に共通する表現形式が禅生活の説法時の記録として見出せる。まづ喜一検校の言葉を引用してみると、

VM. Xite tairiacu Feigemo asoco coco naredomo, vōcata qigitonōitacato zonzuru.

QI. Sarebsareba qijimo qicaxerare, catarimo catarimaraxia cotogia:.....

VM. Satesate naganagaxij cotouo taicutno nō vocatariatano.

QI. Sonovocotogia. Vatacuxiga nagai cotouo

catari maraxia yorimo, taicutmonō qicaxeraretauo

qidocuto zonzuru. Feigemo yuraina tairiacu

conobunde gozaru fodoni, docodemmo co

no monogatarini voiteua, conata

no migoto adouo vtaxe

rareō fodoni, chōfōde

gozaru.

FINIS

となっている。この部分は『大正新修大藏経』の語録に記述されている、提綱・謝語・結座等の構成部分と共通している箇所であらう。『天草本平家物語』はそれに内容を合せたよう綴られている。

提綱・謝語⁽¹⁴⁾・結座とは、禪宗の説法である上堂・小參・囑座等の最後に述べられる結びの言葉であって、これらの説法は問答で進められており、禪宗の本義からすれば中枢をなすべきものだと思われている。従って結びの言葉は、説法の折の内容に応じた語り方がなされるのであるが、語られる内容は類型的なものであり、提綱では今行われた問答に対する説法主体者の総計で説法の主要部分であるとする。結座では（又拈提とも言う）最後にその説法に参考となる古則公案をもち出して、昔の尊宿の見解を述べた上、自己の所見を頌の形に詠じて説法を結んで下座すると言う。謝語とは、この部分がある事があるが、この場合には提綱拈提の間にはいる。これには自叙・摠謝・両班謝・西堂謝等の種類があつて、この中の自叙は自己の不徳を謙遜し、参列の人々に謝礼の語を述べるので、古くから儀式として行われていたと言う。

この提綱・謝語・結座の記述の様態を『大正新修大藏經』所収の日本人の手で著した語録を通して跡づけてみると、時代的に早いものは問答の記載が主でこれらの記述は、「仏照禪師語録⁽¹⁵⁾」では「謝詞⁽¹⁶⁾」、「大覚禪師語録」では「叙謝不⁽¹⁶⁾録」の如くに表現されているに過ぎないが、次第に丁寧な記録されるようになり、「見桃録⁽¹⁷⁾」の「再住正法山妙心禪寺語録」等にはそれらの様態についての詳細な記述が見られる。これは問答に儀礼的な要素が加味されていく風潮が記述の上に反映しているように思えるが、「巻第四」・「第二十八」の喜一檢校の話は、伝統として継承されている形式が、その過程の上で他に反映した一形態と考えるのが妥当であらう。

次に喜一檢校の話と、提綱・謝語・結座の内容とを検討してみると、右馬之允の

VM. Xite tairiacu Feigemo asoco coco naredomo, vōcata qigitouitacato zonzuru.

とのねぎらひの言葉に対して喜一檢校は、

QI. Sarebasareba qigimo qicaxerare, catarimo catarimaraxia cogia ;……………

とあって、この後に平家断絶の話語る旨を述べているが、これに続いて「第二十八」の物語が始まる。これらは提綱に相当する箇所と思われる、その表現内容を、語り手を通して総評の意味で記述し、話の続きを平家断絶に続けているようである。物語は六代が斬られた所で終るが、この後に右馬之允の言葉

VM. Satesate naganagaxij cotouo taicutmo nō vocatariatano.

に導かれ、喜一検校は

Q1. Sonovocologia. *Vaiacuxiga nagai colono catari maraxia yorimo, taicatumō qicaxeraretao qidocuto konzuru*.....

と述べ始めるが、この部分は謝語に当ると思われ、語り手として謙遜の意を示しながら、聞き手に感謝している内容は、自叙の意に通じていると考えてよいであろう。更にこの引用文は左の如く続くのである。

.....Feigeno yuraina tairiacu cono bunde gozaru fodoni docodemmo cono monogatari ni voiteua, conatamo migoto adono vixare rareō *fodemi, chojōde gozaru.*

の部分には、結座に相当する部分と思われる内容として、過去の例を引用しながら自己の見解を述べている点を見出し得る。

従って「巻第四」の「第二十八」の話の内容には前述した説法の問答の折の提綱・謝語・結座の表現形式の影響が伺えるとしてよいであろう。

第三に、禅生活の影響関係を推定し得る点は、茶の表現を見出し得る事にある。然しこの点は、編者の入教以前の身分が禅僧であり、前述した主に第二の問題点を肯定し得る時、関係づけ得る問題点として浮び上って来る性質のものであろう。「巻第四」の「第十一」に、

VM. *Cono chano node iquino tquide, machit to vocatariare.*

Q1. *Ha, corena catijemai; miōgamo nai vohade coso gozare; gocuto miyemaratie gozaru.*

と、右馬之尤が喜一検校に茶を勧める箇所がある。右の表現には語り手である喜一検校の労に報いようとする好意がさりげなく出ており、この勧めに応じる検校の態度も又深い感謝を示しながら雰囲気をも崩す事なく事を運んでいくあたり、見事であると言えよう。このような茶に対する両者の態度は、深い次元において禅的色彩が伺われるように思われる。

語録には禅人の生活が茶と関係深かった事を現す記述が見られる。この点を跡づけてみると、「⁽¹⁸⁾聖」国師住東福禅寺語録」には

元旦上堂。禅非_レ意想_レ立_レ意非_レ宗。道絶_レ功勳。建_レ功失_レ旨。新年消息。不_レ動纖塵。応_レ節納_レ祐。慶無_レ不_レ宜。若作_レ仏法商量。喚_レ鐘作_レ響。若作_レ世諦流布。平地喫交。大眾還委悉麼。孟春猶寒。帰_レ堂喫茶。

と掃堂して茶を喫したとあり、「見桃録」の「巻第一」の詩には、

和ニ松岳和尚茶話韻一

欲レ原ニ鴻橋夢。侍者点レ茶来。

茶罷夢醒後。鐘声被ニ月催一

松岳和尚茶話詩二云。茶兼ニ禪味一

可。能避ニ俗塵一来。且欲ニ停レ車

話。楓林暮色催。

と、茶の禪味に触れており、「(19)仏頂国師語録」の「巻第五」の詩偈には、

雪中客至ニ一首

多謝遠人凌レ雪来。滿爐添レ炭獻ニ

茶杯一。話長共覺飢腸響。

尋ニ得菴前黃獨一回

と心をこめて茶杯を献じたとある。以上の例から、茶は禪人にとって生活に溶け込んだ強いを意味するものであっても、禪に通じる嚴しい要素を見出ししていたのであり、従って茶で客の労をねぎらう事は、意義深い心の現れであった。このような茶に対する禪人の態度は伝統として見られる事であり、しかも「一遷移来不レ受レ護」のような考え方がその底に流れているのである。

従ってこのように茶が禪人の生活に関係深い事を考え、右馬之允と喜一検校とが茶に示した態度をも考えると、茶によってくつろぎを感じさせながらも喜一検校のさざりとした丁寧な応答で雲囲気を引締めているあたり、禅生活の名残りが同われるとみたい。

このように、発問の型・「巻第四・第二十八」の結びと言い得る検校の話・茶には、当時の語録との影響関係を見出し得るが、これは編者の過去の禅生活の反映と解すべきで、問答に現れた傾向と言えよう。

六 結 び

以上述べたように、編者の入教前の身分が禅僧であった事は動かし難い事であり、吉利支丹の教団内では、日本語教師の地位にありしかも責任者の立場で『天草本平家物語』の編纂に当たったと思われる。物語を除いた問答の部分には、前述したように禅生活の影響とみられる傾向が認められる。

物語の部分の特色・傾向については、別の機会に譲るが、原拠に近いと推定された本との校合の結果は、禅宗の影響は認め難く、師の方針が強く反映した傾向が見出せると言えるであろう。

注1 「Docujino fitoni taxite xosu」(読誦の人に對して書す)の一文には、布教への謙虚な願い・物語編纂の爲の師からの指示・平家物語を選択した事・編者の決意等が書かれている。(以下原文の読みは亀井高孝氏の『天草本平家物語』に従う)

2 『カトリック大辞典』一巻の八〇三頁・『吉利支丹文学集』一二二頁・その他。

3 はびあんは棄教して『破提字子』を著した。序では人の勧めで書いたとある。

4 『妙貞問答』の署名。別称の一つであらう。

5 「Rol das casas e residencias que tem a compra na Vice Provincia de Japão neste mez de nouembro do anno de 92. cõ os nomes dos pse e Jrmãos q nellas residem」の和訳。

6 「読誦の人に對して書す」の最後は編者としての立場から謙虚に文を結んでいる。

7 「三章」の前半は主に当時の耶蘇会士が日本における状況を欧州に報じた年々の書簡を集めた文献から資料となる関係記事を集めたものである。

主な参考文献は『耶蘇会士日本通信・豊後篇(上)』・『耶蘇会の日本年報・第一輯・第二輯』・『ルイス・フロイス日本書翰』・『日本西教史・下』

吉利支丹大名のローマ教皇及びポルトガル国王に対する使節。マンシヨ伊東祐益・ミゲル千石清佐衛門・中浦ジュリアン・原マルチノ。

9 『大正新修大蔵経』八十巻・八十一巻・八十二巻』等。

10 『大日本仏教全書書籍目録』・『仏書解説大辞典』・『大日本仏教全書』等。

11 編者はドミニコ会の教師とされているがイエズス会の教師の中できたものであらうとされる(Didaco Collato)。一六三三年ローマで刊行された懺悔告白であるが、この種のもは元来残さないのである。傍証にはならう。

12 「祇王」の章段の位置を考える為の大きな問題点の一つにならう。

13 汾陽善昭は問答応酬に種々の態度があるとして問話の型を十八に分類して考えている。『禅学研究法とその資料』

- 14 説法の一 種である兼 払には謝語はつくことがない。
- 15 白懸曉、語一三三三〜二二九七。
- 16 蘭溪道隆、語等一二二三〜一二七八。
- 17 大休宗林、語一四六八〜一五四九。
- 18 円爾弁円、語二七八〜一三四六編。
- 19 一絲文守、語一六〇八〜一六四六。
- 20 補 『国文学字攷』の「天草版平家物語の原拠覚書」(清瀬良一氏著)・その他。

○引用資料の棒線及び「*等*」の箇所は目に留めやすいようにしたものである。

○発問の型の分類表の基準は、内容及び述部の表現によって所属の型を決めた。従って観方によっては数に動きが生じる箇所もある訳であるが、全体の傾向としては変らないと思う。